



薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業 共有すべき事例

2022年
No.12
事例2

疑義照会・処方医への情報提供

漫然とした投与



事例

【事例の詳細】

トアラセット配合錠 1日4錠1日4回とドンペリドン錠10mg「日医工」 1日4錠1日4回が継続して処方されていた。患者は吐き気がなかったため、ドンペリドン錠10mg「日医工」を服用していなかった。現時点で吐き気がないことを確認したうえで、処方医に情報提供し処方中止を提案した結果、ドンペリドン錠10mg「日医工」が削除になった。

【推定される要因】

処方医は、トアラセット配合錠の副作用を懸念してドンペリドン錠10mg「日医工」を処方していた。患者は、吐き気はなく、ドンペリドン錠10mg「日医工」を服用していないことを処方医に伝えていなかった。

【薬局での取り組み】

患者から服薬状況を聞き取り、漫然とした投与になっていないか確認する。



その他の情報

トアラセット配合錠の添付文書^{*} 2020年4月改訂（第3版）（一部抜粋）

8.重要な基本的注意

8.3 悪心、嘔吐、便秘等の症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、悪心・嘔吐に対する対策として制吐剤の併用を、便秘に対する対策として緩下剤の併用を考慮するなど、適切な処置を行うこと。

^{*} 報告された事例にはトアラセット配合錠の屋号が記載されていなかったため、先発医薬品のトアラセット配合錠の情報を掲載した。

非がん性慢性疼痛に対するオピオイド鎮痛薬処方ガイドライン 改訂第2版^{*}（一部抜粋）

II.慢性疼痛のオピオイド鎮痛薬による治療

3.オピオイド鎮痛薬による治療の副作用

CQ18:オピオイド鎮痛薬による悪心・嘔吐をどのように管理するのか？

副作用としての悪心・嘔吐は、オピオイド鎮痛薬の治療開始時に起こりやすく、予防的な制吐薬の使用が推奨される。耐性が形成されるため、1～2週間程度で改善することが多いが、オピオイド鎮痛薬の増量時には改めて対策が必要である。

解説：オピオイド鎮痛薬による悪心・嘔吐は、非がん性慢性疼痛患者においては14～34%の頻度で見られるため、対処する必要がある。しかし、この悪心・嘔吐は、耐性の形成によって改善することが多く、一般的には、制吐薬の長期投与は不要である。

^{*} 日本ペインクリニック学会 非がん性慢性疼痛に対するオピオイド鎮痛薬処方ガイドライン作成ワーキンググループ・編。
https://www.jspc.gr.jp/Contents/public/kaiin_guideline08.html



事例のポイント

- トアラセット配合錠および後発医薬品のトアラセット配合錠は、1錠中にオピオイド鎮痛剤のトラマドール塩酸塩37.5mgと解熱鎮痛剤のアセトアミノフェン325mgを配合した薬剤である。服用後に悪心、嘔吐、便秘等の症状があらわれることがあるため、患者によっては制吐剤や緩下剤などの併用を考慮する必要がある。
- 本事例は、薬剤師がトアラセット配合錠服用後の副作用の発現状況やドンペリドン錠10mgの服薬状況を丁寧に聞き取り、処方医へ情報提供したことでドンペリドン錠10mgの漫然とした処方の継続を防いだ事例である。
- 副作用発現に対して予防あるいは軽減目的で処方された薬剤が継続されている場合は、副作用好発時期を考慮したうえで、患者の服薬状況や副作用発現の有無を確認し、処方医にそれらの情報を提供して服薬継続の要否を確認することが重要である。



公益財団法人 日本医療機能評価機構
医療事故防止事業部

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1-4-17 東洋ビル
電話：03-5217-0281（直通）FAX：03-5217-0253（直通）
<http://www.yakkyoku-hiyari.jcqh.or.jp/>

※この情報の作成にあたり、作成時における正確性については万全を期しておりますが、その内容を将来にわたり保証するものではありません。※この情報は、医療従事者の裁量を制限したり、医療従事者に義務や責任を課す目的で作成されたものではありません。※この情報の作成にあたり、薬局から報告された事例の内容等について、読みやすくするため文章の一部を修正することがあります。そのため、「事例検索」で閲覧できる事例の内容等と表現が異なる場合がありますのでご注意ください。